いのちと地域を守る

巡り語り備える

むすび塾100回

河北新報社は東日本大震災の教訓を今後の備えに生かすため、巡回ワークショップ「むすび塾」を2012年5月に始めた。宮城県内を中心に月1回のペースで続け、21年2月で100回を数えた。住民と防災の専門家らが、被害と犠牲をできる限り抑える方法と、一人一人が取るべき行動を話し合う。震災発生から10年が過ぎ、むすび塾の必要性は一段と高まっている。

住宅などに津波の浸水痕が残る東松島市大曲貝田地区で実施した第１回むすび塾。住民が教訓を共有し、地域に必要な備えを話し合った＝2012年５月６日

これまでの開催地とテーマは表の通り。参加者は住民延べ1052人、専門家延べ94人、震災の語り部73人。沿岸部での津波対策のほか、内陸部では地震、風水害などへの備えを提案してきた。

むすび塾に取り組むきっかけは、震災発生から半年後の11年夏に実施したアンケート。宮城県沿岸部の被災者に、河北新報の防災報道について聞いたところ「（震災で）役に立たなかった」が72％を占めた。

河北新報は宮城県沖地震を想定し、震災前から防災報道に力を入れてきたが、備えの行動に結び付かず、震災での甚大な被害を防げなかった。加えて、震災による実際の被害の様相は、リアス海岸と平野部、漁村と都市でそれぞれ異なり、必要な対策も違っていた。

こうした反省に立ち、地域に応じた備えの情報を直接届けるため、住民を対象にワークショップを開くことを決めた。記事には防災対策を分かりやすく、目立つように伝えるため、イラストを添えた。

13年1月からは年数回、むすび塾全国編も開催。南海トラフ巨大地震が心配されている地域などで震災の教訓を伝え、将来の備えを促した。被災地の参考となる全国各地の先進的な防災対策も紹介した。

14年6月からは全国編を発展させ、地方紙、放送局とむすび塾を共催。地元の報道機関を通し、震災の教訓やワークショップの成果を広く発信した。

同年からは年1回、日本損害保険協会（東京）と連携し、安全教育プログラム「ぼうさい探検隊」を取り入れた児童向けのワークショップを実施。児童と地域を歩き、危険な場所や避難できる建物などを確認し、防災マップにまとめた。

むすび塾開催後、具体的な行動を起こした地域や職場もある。日中に家に居るお年寄りだけで避難訓練を実施した町内会、通信が途絶した際の連絡手段を配備した病院、遠方の宿泊施設と災害時支援協定を結んだホテルなどだ。

被災地では震災発生後、住民同士で当時を振り返る機会がほとんどなかった。むすび塾はコミュニティーやコミュニケーションの大切さを再確認する最初の機会になった。

震災から年月がたつにつれ、震災の当事者にとっては、被災直後の不安や課題を思い出し、共有する場になった。震災当時幼かった中高生は、参加前に親らに震災の話を聞いており、家庭内で震災を伝承する機会にもなっている。

今野俊宏取締役編集局長は「震災10年を経て風化を防ぐ『伝承』と次の災害に備える『防災・減災』の重要性はますます高まる。むすび塾を学校などで続けることで、震災を知らない世代への教訓の伝承にもつなげたい」と話す。

宮崎日日新聞と共催した第37回むすび塾。保育士が避難訓練で幼児を乗せた乳母車を押しながら高台を目指した＝2014年10月28日、宮崎市の木花公園

■むすび塾の開催地とテーマ

	開催地	テーマ
1	東松島市・大曲貝田行政区	地域の連携と家庭の備え
2	多賀城市・東北電機製造	災害に強い事業環境づくり
3	宮城県村田町・足立西行政区	ダム決壊のリスクと備え
4	宮城県女川町・桐ケ崎仮設団地	応急仮設住宅の備え
5	岩沼市・南浜中央病院	病院の備え
6	気仙沼市・大島要害地区	島が孤立した時の備え
7	石巻市・石巻みづほ幼稚園	幼稚園の備え
8	宮城県山元町・花釜地区	津波被災した地域の備え
9	仙台市・荒巻地区	要援護者支援
10	宮城県南三陸町・歌津中	避難所生活の課題と教訓
11	愛知県田原市・堀切校区	地域の避難ルールづくり
12	高知県四万十町・興津地区	要援護者の支援と地域の孤立
13	仙台市・ロイヤルシャトー長町	集合住宅の備え
14	宮城県七ケ浜町・花渕浜自主防災会	住民の安否確認
15	東京都品川区・八潮団地	巨大団地の備え
16	男鹿市・荒町町内会	車避難
17	インドネシア・バンダアチェ市など	津波避難の課題共有
18	三重県尾鷲市・川原町自治会	要援護者の避難
19	石巻市・鮎川小	津波避難
20	静岡県下田市・吉佐美地区	南海トラフ地震の津波避難
21	名取市・閖上上町町内会	被災教訓の伝承
22	千葉県白子町・南白亀地区	津波避難と備蓄
23	石巻市・めだかグループ	福祉施設の備え
24	大崎市・鳴子温泉鬼首原地区	土砂災害対策
25	宮城県女川町・女川中	被災体験の発信
26	宮城県亘理町・あぶくま町内会	津波発生時の避難行動の課題
27	チリ・コンスティトゥシオン市など	被災体験の伝承
28	宮城県丸森町・金山地区自主防災会	避難所開設と運営
29	宮城県南三陸町・南三陸ホテル観洋	観光施設の備え
30	神奈川県横須賀市・長井連合町内会	津波対策
31	宮城県亘理町・旭台町内会	自主防災組織の活動
32	仙台市・三条地区	地域住民と外国人の連携
33	北海道釧路市・大楽毛地区	冬場の備え
34	相馬市・みなと保育園	避難訓練と津波教育
35	東松島市・大曲小学区子ども育成会	非常持ち出し袋
36	宮城県七ケ浜町・代ケ崎浜	地域防災活動の活性化
37	宮崎市・木花、島山地区	平野部での津波避難
38	多賀城市・桜木南区子供会	地域の防災マップ作成
39	名取市・尚絅学院大	要援護者支援
40	仙台市・南蒲生町内会	災害発生時の避難行動
41	京都市・向島ニュータウン	集合住宅の連携と備え
42	宮城県涌谷町・10区自治会	河川氾濫への備え
43	仙台市・東四郎丸児童館	地域の防災マップ作成
44	栗原市・耕英	岩手・宮城内陸地震の教訓
45	東京都文京区・大塚6丁目	地震火災対策
46	宮城県美里町・駅東行政区	新興住宅地の備え
47	気仙沼市・阿部長商店	職場の防災対策
48	大阪市住吉区・東粉浜小	津波からの2次避難
49	塩釜市・浦戸小中学校	地域の防災マップ作成
50	宮城県山元町・花釜地区	むすび塾開催後の取り組み
51	石巻市・八幡町	要援護者の支援
52	高知市・潮江南地区	学校と住民の連携
53	石巻市・大興水産	事業所内の教訓の共有
54	宮城県蔵王町・宮司行政区	噴火への備え
55	仙台市・八木山地区	地域の防災マップ作成
56	宮城県山元町・つばめの杜地区	集団移転地の防災対策
57	東松島市・宮戸島月浜	観光客への災害対応
58	兵庫県南あわじ市・福良地区	南海トラフ発生時の観光客の避難誘導
59	大崎市・高倉小学区	地域の防災マップ作成
60	仙台市・仙台港地区	企業の防災力向上
61	愛知県碧南市	津波避難訓練
62	石巻市、東松島市	震災伝承
63	共催むすび塾・被災地	地域の防災
64	宮城県南三陸町・歌津寄木地区	新旧住民が避難訓練
65	仙台市・岩切	防災活動への女性の参加
66	仙台市・種次	津波避難時の高速道路活用
67	東京都墨田区・曳舟	首都直下地震発生時の火災避難
68	多賀城市	障害者の備え
69	宮城県亘理町・荒浜鳥の海	被災観光地の津波防災
70	岩沼市・臨空工業団地	工業団地の津波対策
71	宮城県大和町・吉岡小学区	地域の防災マップ作成
72	高知県安芸市	夜間の津波避難
73	東松島市・赤井	女性の視点を反映した避難所運営
74	東松島市、宮城県女川町	若者による震災の伝承
75	神奈川県平塚市	揺れ対策と垂直避難
76	気仙沼市	外国人の避難対策
77	宮城県七ケ浜町・笹山	海水浴客の避難誘導
78	静岡市・駿河区	南海トラフの津波避難
79	岩沼市・里の杜3丁目	自主防災組織の活動
80	仙台市・蒲生	工業団地の企業の防災連携
81	石巻市・中央	飲食店の避難誘導
82	富谷市・東向陽台小	地域の防災マップ作成
83	仙台市・市名坂	女性の視点を反映した避難所運営
84	三重県伊勢市・二見浦	南海トラフの津波避難
85	宮城県七ケ浜町	若い世代による震災の伝承
86	高知市・はりまや橋小学校区	商店街の避難訓練
87	東松島市・矢本二中	若者による震災の伝承
88	名取市・閖上	津波被災した地域の再生と備え
89	仙台市・CILたすけっと	車いす利用者の避難
90	福井県坂井市・三国	港町での津波避難
91	宮城県獣医師会	ペットの同行避難
92	山形県遊佐町・吹浦	日本海側の津波避難
93	仙台市・根白石小	地域の防災マップ作成
94	宮城県柴田町・仙台大	学生と地域の連携
95	宮城県亘理町・下茨田	集団移転地での備え
96	東松島市	新聞販売店の備え
97	宮城県聴覚障害者情報センター	聴覚障害者と支援者の備え
98	宮城県松島町・松島中	中学生にできる家庭・地域の防災活動
99	多賀城市・多賀城高	マイタイムラインを作ろう
100	311メディアネット（オンライン）	次世代への伝承、遠隔地との連携

若い世代育成 主な課題

過去の議論 研究者分析

巡回ワークショップ「むすび塾」は、自然災害と防災をテーマに多様な参加者が意見を交わしてきた。2019年6月に福井県で開催したむすび塾に参加した福井工大の竹田周平教授と卒業生の原山千聡さん(23)が、過去100回の議論の傾向や課題、成果を分析した。

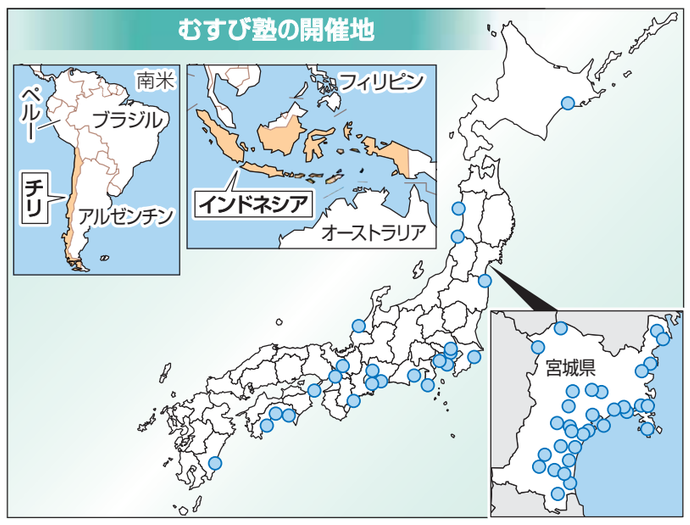
むすび塾の開催地は地図の通り。国内のうち宮城県内が72回、県外は25回、海外はインドネシア、チリの2回。他にオンライン形式が1回だった。

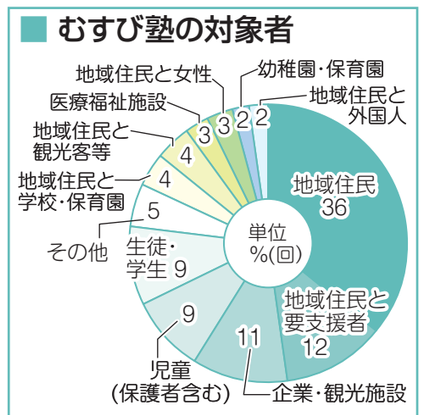
対象は町内会、自治会をはじめとする地域住民が36回で最も多く、地域住民と要支援者12回、企業・観光施設11回、児童（保護者を含む）と、生徒・学生がそれぞれ9回と続いた。テーマに想定した自然災害は地震・津波が74回、地震（夜間を含む）が11回、河川氾濫・台風が10回など。

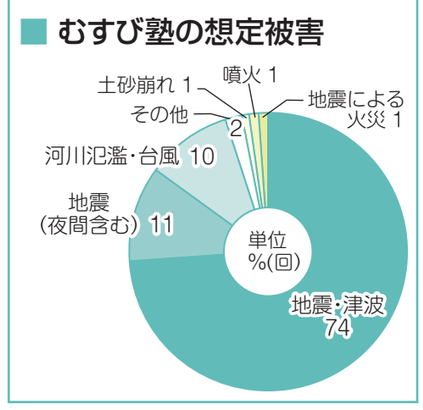
開催形式は、語り合いが83回、避難訓練と語り合いが17回。語り合いの議論のタイプ別は、地域や企業などが防災について課題を議論する「課題探求型」62回、災害の教訓を後世に伝える「防災マップ作成型」8回、「伝承型」7回、児童に防災について教える「災害教育型」4回、その他2回だった。

課題として「震災伝承の必要性」「住民への避難経路やルートの周知」「住民同士の交流活性化」などが、複数の地域で上がった。災害伝承活動や防災活動を担う若い世代の育成も、各地で望まれていた。

竹田教授は「むすび塾のように100回にわたり、継続的に住民と助言者が地域防災の課題と対策を話し合ってきた防災の取り組みは前例がないだろう。次の10年、また100年後においても、震災の記憶を継承し、次に発生する大震災に役立つ資料となってほしい」と期待した。







河北新報社は新型コロナウイルスの感染防止に取り組みながら、東日本大震災10年が過ぎた今後も、むすび塾を随時開催します。震災をはじめ自然災害の被災体験を振り返り、教訓や備えを考えてみませんか。町内会や学校、職場など少人数の集まりが対象です。開催は無料。随時、受け付けています。連絡先は河北新報社防災・教育室022（211）1591。

防災・減災のページ

第100回巡回ワークショップ　@311メディアネット

むすび塾

オンライン開催

防災 日常の延長に

伝承や活動活性化を意見交換

河北新報社など全国の地方紙、放送局でつくる「311メディアネット」＝?＝は2月13日、防災ワークショップ「むすび塾」を、初めてオンラインで各地をつないで開催した。東日本大震災の津波で児童74人、教職員10人が犠牲になった石巻市の旧大川小から20代の語り部が中継で活動を報告したほか、各地で防災活動に取り組む10～30代の11人が、次世代への災害伝承や防災活動の活性化をテーマに意見を交わした。むすび塾は100回目の節目の開催となった。

大川小卒業生の東北福祉大4年永沼悠斗さん(26)が語り部を務め、楽しかった学校の思い出や津波で弟、祖母、曽祖母を亡くしたことなどを振り返った。

震災2日前の前震に触れ「大切な人の命を守るため2日間でできることがあったはずだ。それが語り部活動の原点になっている」と話し、各地で想定される巨大災害への備えを促した。

意見交換で、宮城県女川町で教育支援に携わるNPO法人カタリバ（東京）の芳岡孝将さん(36)は「先輩世代と違い、今の中学生は震災発生時、どこにどう避難したのかほとんど覚えていない」と被災地の現状を説明した。

福井高専専攻科1年の水島美咲さん(21)は、到達時間の短い日本海側の津波を懸念。高齢者が玄関先まで移動することで安否確認と津波避難を一度に行う避難訓練などの事例が示されると、メモをした。

防災の堅いイメージの払拭(ふつしょく)が、参加者共通の課題だった。神奈川県内で活動する「3・11つなぐっぺし」高校生代表の井ノ上敦也さん(17)は音楽、遠足、食の要素を取り入れた防災イベントを紹介した。

関西大高等部（大阪府高槻市）2年の坂本紫音さん(17)は「防災を日常の延長と考えてはどうか」と提案。高知大2年の佐野太亮さん(20)は、サークルで「一日車中泊」などの体験ルポを情報発信している活動を報告した。

「東日本の被災地から遠く、地域の人が震災を自分事として捉えにくい」。宮崎大4年の白石麻緒さん(22)が悩みを明かすと、参加者からは避難所運営を切り口に震災を疑似体験するアイデアなどが出された。

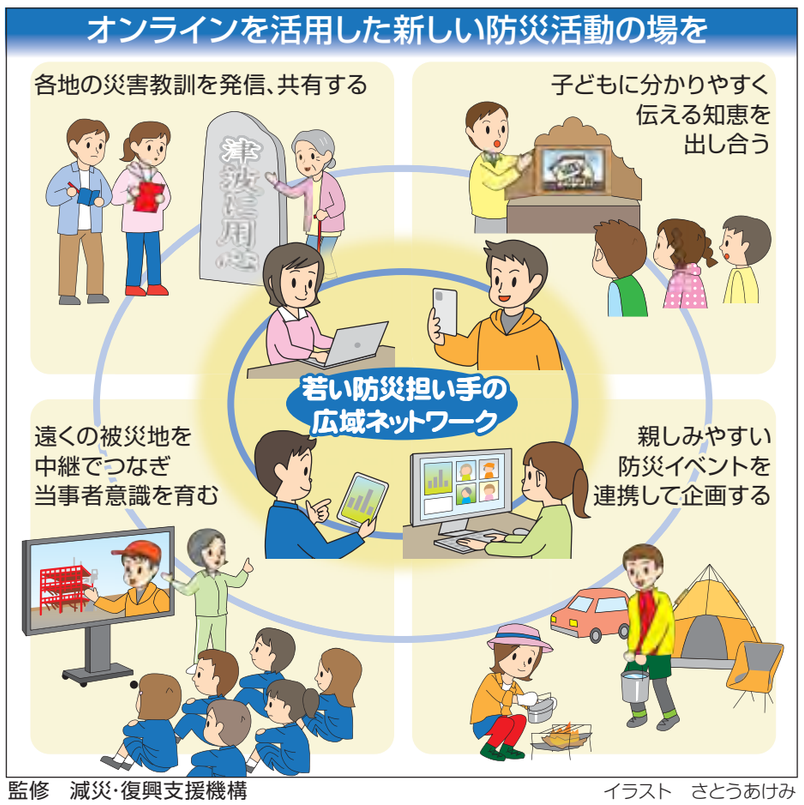
龍谷大（京都市）4年の川村有希さん(22)は就職後も被災地への支援活動が続けられるか、不安を抱えていた。助言者として減災・復興支援機構（東京）の木村拓郎理事長、宮下加奈専務理事も参加。宮下さんは「今回参加した皆さんでインターネットを活用した新しい防災活動の場を作ってみては」と勧めた。

災害伝承について「災害を経験していない世代も語り継ぐことが大事」と話したのは、神戸市を拠点に活動する「1・17希望の架け橋」代表の藤原祐弥さん(19)。4月から教員になる北海道教育大4年の佐藤愛佳さん(23)は「被災地とつながり、児童が家庭で防災の話をするきっかけを作りたい」と決意を述べた。

議論の後、東海大付属静岡翔洋高1年の深沢琉華さん(16)は「防災について新聞投稿を続ける」、NPO法人レスキューストックヤード（名古屋市）の森本佳奈さん(38)は「皆さんを東海地域の10代、20代とつなぎたい」と誓った。

参加者からは、今後の継続的な連携を希望する声が相次いだ。支援機構の木村さんは「定期的にオンラインでむすび塾を開き、被災地や各自の活動について情報交換してはどうか」と提案した。

ワークショップを終えて、オンラインの中継画面に誓いの言葉を掲げる参加者



監修　減災・復興支援機構　　イラスト　さとうあけみ

?　311メディアネット　河北新報社が展開する防災の巡回ワークショップ「むすび塾」を共催した全国の地方紙、放送局が参加するネットワーク。共催のつながりを生かし、連携して防災機運を盛り上げるため、東日本大震災の発生日前後に共通タイトルの特集や連載、番組を組む。今年が4回目。

北海道新聞、河北新報、東京新聞、神奈川新聞、福井新聞、静岡新聞、中日新聞、京都新聞、毎日放送、神戸新聞、高知新聞、宮崎日日新聞

■ むすび塾に参加して

語り部活用して授業

北海道教育大釧路校4年　佐藤　愛佳さん(23)

所属する研究室では防災教育として津波から自分の命を守るためにどう行動すればいいかを伝える活動をしている。ワークショップで、防災は日常生活の延長線にあると学べた。

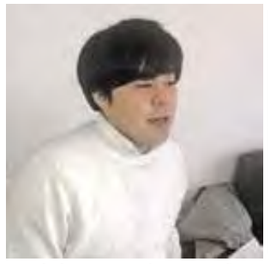
出身は白石市。中学1年の時、東日本大震災があり、地震や停電、断水を経験した。北海道の釧路、根室管内でも千島海溝沿いの巨大地震による大津波が想定されており、災害はいつ起こるか分からないと強く感じた。

4月から北海道の小学校教員になる。自然災害に備え、日常的に子どもたちと校舎内や通学路の危険箇所を探したり、避難経路の確認に取り組んだりしたい。大震災の語り部の人たちとつながって、当時の話も授業に取り入れたい。

（取材　北海道新聞・熊谷知喜）

記憶継承 大切さ実感

NPO法人カタリバ女川向学館（宮城県女川町）副拠点長　芳岡　孝将さん(36)



東日本大震災発生時は青年海外協力隊の一員としてモザンビークで教員をしており、翌2012年、東北の子どもたちの力になれたらとNPO法人カタリバ（東京）に入った。

現在は宮城県女川町に住み、「女川向学館」を拠点に、子どもたちの放課後の居場所づくり、学習支援などに取り組んでいる。

これまでは子どもたちに寄り添い、将来を描いていくことに力を注いできた。今回のように他の地域の人たちと交流することで防災を考え、記憶を継承する大切さを改めて感じている。

震災で大きな被害を受けたこの町にいるからこそ学べること、社会に語り継ぐことがある。女川の子どもたちと防災や命について考えていきたい。

（東京新聞・土門哲雄）

新たな発想得られた

3・11つなぐっぺし（神奈川県）高校生代表　井ノ上敦也さん(17)

イベントを通じて東日本大震災の風化防止と防災意識の向上を目指す所属団体の活動に興味を持ち、参加してきた。ただ、風化防止は形として見えないので、活動の手応えを感じにくい。防災は取っ掛かりにくいイメージもある。

だから「防災×楽しいこと」を目標にロックフェスや紙芝居、防災遠足、被災地産の肉を食べるミートフェスを企画し、若者が興味を持つきっかけづくりに努めてきた。むすび塾では自分にはなかった発想やアイデアを知ることができた。

日常生活に防災を混ぜ込んでいくという考え方はすごくいいし、みんなと共有できる場の大切さを実感した。今後、このつながりを生かしてコラボし、質の高い活動につなげたい。

（神奈川新聞・渡辺渉）

失敗恐れず行動する

福井高専専攻科1年　水島　美咲さん(21)

2019年に被災地を訪問し、宮城県内を巡った。今回語り部として参加した永沼悠斗さんらから直接話を聞き、防災に対する意識が180度変わった。

訪問後は自分の地域のラジオ番組で思いを伝えたり、地震が起きたらどうするかを家族と話し合ったりした。最近は行政や地域と連携する授業で、冬季のコロナ禍での地震・津波発生を想定した住民の避難方法を考察して発表した。

議論を聞き、自分にできることをやって輪を広げたいと改めて思った。前回の被災地訪問後に私がやったことは地味だが、小さな試みも将来につながる。

失敗を恐れず、できることを行動に移していきたい。今回できた同年代とのつながりも大切にしたい。

（福井新聞・岩渕善郎）

いのちと地域を守る

人とのつながり課題

関西大高等部（大阪府高槻市）2年　坂本　紫音さん（17）

2015年に小学６年で「関西最年少の防災士」になった。きっかけは東日本大震災。津波の映像に衝撃を受け、直後に生まれた８歳下の弟の命を守りたいと勉強を始めた。

永沼さんが８歳下の弟を大川小で亡くしたと聞いて「わがこと」として考えずにはいられなかった。

「防災は日常生活の延長線上にある」と話したら、議論のテーマとなり、考えが確信に近づいた。皆さんのアイデアの数が備えにつながる。

人と人とのつながりをどう作っていくかが、全国共通の課題だと感じた。自宅から離れた私立小・中・高校に通ってきた自分が、暮らしている地域とどうつながっていけるのか、これから考えていきたい。

（毎日放送・亘佐和子）

南海トラフに備える

1・17希望の架け橋（神戸市）代表　藤原　祐弥さん（19）

今回、むすび塾で得たものがたくさんあった。中でも強く感じたのは、震災の風化や自分より若い世代への伝承など、自分が抱えていた課題が全国各地の人たちと共通していたことだ。

今まで大きな災害が起きた被災地でしか、防災について熱心に学習していないと思っていたが、全国各地で防災の取り組みや語り部活動をしていると知り、もっと自分自身頑張らないといけないと思った。

所属する団体は阪神・淡路大震災の語り部活動や小中学校で震災伝承の出前授業をしている。これからもたくさんの人に自分たちの活動を広めていきたいし、将来起こりうる南海トラフ巨大地震に向けた防災、減災活動にも取り組んでいきたい。

（神戸新聞・森本尚樹）

「楽しく伝える」重視

高知大学防災すけっと隊副代表・高知大2年　佐野　太亮さん（20）

静岡で東日本大震災、広島で西日本豪雨を経験したことで、災害は誰でも当事者になり得ると自覚した。

現在、大学で防災を学びながら「高知大学防災すけっと隊」というサークルで活動している。楽しく伝えることを重視し、災害への備えを呼び掛けている。

学校で防災授業をしたり、備蓄食料の生産を目的とした「耕作放棄地を防災に活かすプロジェクト」を地域の人と協力して実施したり。車中泊など、メンバーがやってみた防災活動を会員制交流サイト（ＳＮＳ）で発信もしている。

課題は、大学内への働き掛けができていないこと。コロナ禍でイベントができない状況だけど、オンラインなどで継続的に活動していきたい。

（高知新聞・福井里実）

堅苦しく考えないで

宮崎県わけもん防災ネットワーク代表・宮崎大4年　白石　麻緒さん（22）

宮崎県内の児童養護施設などで、防災教育と子ども食堂を組み合わせた「防災子ども食堂」を年に数回開催している。講話だけでなく、災害時に使うスリッパを新聞紙で作ったり、非常食の試食をしたりと、体験してもらうことを大切にしている。

今の子どもたちは東日本大震災をリアルタイムで知らず、どのように伝えれば「自分事」として捉えてくれるのかが難しい。

これまで防災について重いものだと感じていたが、「むすび塾」に参加し、堅苦しく考えず、日常生活の中に落とし込むことが重要だと感じた。大学卒業後も活動に携わっていくので、今回知り合えた参加者とつながり、取り組みを発展させていきたい。

（宮崎日日新聞・成田和実）

学んだことを地元へ

防災アイドルグループリーダー・東海大付属静岡翔洋高1年　深沢　琉華さん（16）

これまで何度も東北にボランティア活動に行き、被災者と歌や踊りで交流してきたが、自分が今、生きていることの幸せや防災対策についてあまり深く考えたことがなかった。

むすび塾で全国の参加者から具体的な防災の取り組みを学べた。次は自分の学校や静岡県民の防災のために学んだことをどう伝えられるか、考えていきたい。

高校生の参加者は私を入れて３人だった。若い世代だからこそ伝えられることもある。行動しなければ伝わらないが、むすび塾のような場を自分たちで作れば、防災についてみんなに伝えたり、みんなで考えたりすることができることが分かった。防災にもっと多くの人が興味を持ってくれたらいいなって思う。

（静岡新聞・鈴木誠之）

若者の活動知り刺激

NPO法人レスキューストックヤード（名古屋市）スタッフ　森本　佳奈さん（38）

東日本大震災後、被災地のボランティア活動などを経験し、ＮＰＯ法人レスキューストックヤードに2014年に入り、現在は愛知県に避難した被災者の支援を担当している。揺れの体験や工作などを通して防災を楽しく学ぶ「あそぼうさい」にも取り組んでいる。

むすび塾では各地の若者の活動を聞くことができ、刺激を受けた。防災意識を高める取り組みの中で話題になった「楽しい防災」「日常の中での防災」について、考えを深めたい。

支援する避難者の中にも若い世代がいる。そういう若者が胸の内を明かし、分かち合える場ができればと思う。熱心に活動する皆さんとの「つなぎ役」となり、今回できた輪を広げていきたいと考えている。

（中日新聞・梅田歳晴）

助言得て視界開けた

龍谷大（京都市）ボランティア・NPO活動センター学生スタッフ・龍谷大4年　川村　有希さん（22）

大学の復興支援ボランティアとして石巻市雄勝町を３年連続で訪れ、人手不足で存続の危機に一時直面した伝統行事「雄勝湾灯籠流し」を手伝い、語り部の証言を聞いてきた。大学の文化祭では被災地の写真展示ブースを設け、見聞きしたことを伝えてきた。

卒業後は防災活動の場がなくなると思っていたが、今回、「自分たちで新しい場を作って広げたらいい」「防災はあくまで日常生活の延長線上にある」との助言を得て視界が開けた。

４月から滋賀県の高齢者福祉施設で働く。寝室から玄関先まで逃げる高知県黒潮町の「日本一短い避難訓練」など各地の事例も参考にしながら、自分と周囲の命を守るために何ができるのかを考えていきたい。

（京都新聞・森敏之）

事前の対策が大事

全国の取り組み逆輸入

大川伝承の会・東北福祉大4年　永沼　悠斗さん（26）

旧大川小からオンライン中継で語り部活動をした永沼さん＝2月13日、石巻市釜谷

311メディアネット　いのちと地域を守る2021

震災の津波で大川小2年の弟(8)を亡くした。自宅も流され、祖母(65)と曽祖母(88)＝年齢はいずれも当時＝も亡くした。遺族、卒業生として大川小の被害と思い出を伝えることで、聞く人に震災を自分事と捉えてほしくて語り部をしている。

大川小の児童は地震発生後50分間、校庭にとどまり、避難を開始したのは津波が来る1分前だった。避難の判断をできなかった事実を教訓にし、どうすれば大切な人の命を守れるか考えなければいけない。

私の後悔は3月9日の地震。海岸で大きな揺れに遭い、津波が怖くて走って帰宅した。夜、家族にその話をしなかった。話していれば、大切な家族の命を守れたかもしれない。

皆さんにとっては東日本大震災が3月9日で、南海トラフ地震や首都直下地震が3月11日に当たると思う。地震発生までの時間を大切に使ってほしい。

被災3県の若者と連携して語り合いの場「若者トーク」を開催している。震災10年。次の世代に伝え続けることが一層大事になる。

皆さんとのつながりを継続させて、全国の防災の取り組みを被災3県に逆輸入したい。皆さんと一緒に情報を発信しながら、自分も次の災害に備えたい。

（河北新報・渡辺ゆき）

各種催しとコラボを

理事長　木村　拓郎さん（72）

石巻市に高齢者の体力作りに力を入れていた福祉施設があった。足腰が衰えると移動に時間がかかってしまう。日頃の健康維持、老化防止が、東日本大震災では速やかな津波避難につながった。

農業や子ども食堂と防災をコラボさせた活動の発表があった。もっといろんなイベントに売り込みをかけてはどうか。防災に関心が高くない人との接点が生まれ、役立つ情報を届ければ活動の輪が広がる。

震災の影響もあり、皆さんは津波をかなり意識していると感じた。家具の転倒防止をはじめ、揺れから身を守る地震対策も忘れないでほしい。沿岸部では動線確保とけがの予防につながり、円滑な津波避難に直結する。

■減災・復興支援機構の専門家から

キャンプで疑似体験

専務理事　宮下　加奈さん（51）

防災を楽しくするアイデアとして、キャンプを取り入れてはどうだろう。被災時の疑似体験になる。

キャンプをしましょうと呼び掛け、電気、ガス、水道が使えない想定で、みんなで飯ごうなどを使って食事を作ってみる。そこで「被災地でこんなことを聞いてきた」と伝え合うことで、防災が身近になる。

防災訓練というと、主催者が全てお膳立てをして、炊き出しをする傾向が強い。手軽に多くの人に集まってもらうために、家にある備蓄食品を持ち寄る訓練を提案したい。

家庭菜園がある人や農家に、野菜の提供を呼び掛けて一緒に味見をする。被災時は、地域のみんなで助け合うんだという共助の意識付けにもなる。